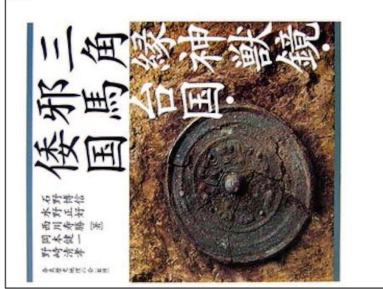
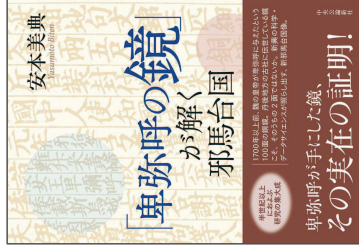


銅鏡と日本古代史

清水徹朗

〔日本古代史における鏡の重要性〕

- ・ 古墳等から大量の銅鏡が出土（6,260面、うち三角縁神獣鏡597面）
- ・ 大和政権（王権）の確立過程で中央（大和）から地方の豪族に銅鏡を威信財として配布し、王権確立に重要な役割を果たした。
- ・ 邪馬台国の卑弥呼が魏から「銅鏡百枚」をもらう（『魏志倭人伝』）
- ・ 「三角縁神獣鏡」が卑弥呼が魏からもらった銅鏡であるとの有力な説があり、明治期以降、多くの研究・論議が行われてきた。
- ・ 近年でも鏡の研究はさらに深化しており、その研究が「邪馬台国 畿内説」の根拠となっている。



1. 「銅鏡」とは何か

- ・ 「銅鏡」とは、銅に錫や鉛を加えた金属で作られた鏡であり、**磨いた面で光を反射**する。
- ・ 現在一般に用いられているガラス製の鏡は14世紀にイタリアのベネチアで考案されたものであり、19世紀にドイツで硝酸銀をガラス面に付着させる技術が開発され普及した。
- ・ 古代の日本では銅が貴重であり、鏡の製造技術も高度であったため、銅鏡は「**威信財**」として配布され、権力者の墓に埋葬された。
- ・ 現在でも、伊勢神宮をはじめとする神社の「**御神体**」になっており、天皇の地位を示す「三種の神器」の一つになっている。



3

2. 銅鏡の原料

- ・ 銅鏡の原料は**銅と錫、鉛**であり、一般には銅の割合は8～9割、錫が5～10%、鉛が5%程度である(「青銅」と呼ばれる)。
- ・ 銅は錫を加えることで高度が増し、錫の割合が高いほど白くなる。逆に銅の割合が高いと赤銅色になる(10円硬貨は銅が95%、亜鉛3～4%、錫1%)。鉛は融点を下げ、銅と錫をつなぎ合わせる役割を有す。
- ・ 融点は銅1083℃、錫232℃、鉛328℃であり、鉄の融点(1538℃、酸化鉄は1360℃)より低い。

3. 銅鏡の製法

- ・ 鏡は、石または土で作った鑄型に溶かした銅の合金(青銅)を注いで製造する。鑄型の裏面には、**文様(神獣等)**や**銘文**を彫り込む。冷却したあと取り出し、研磨して完成させる。
- ・ 一つの鑄型を複数回、原料を流し込んで作ったものを「**同范鏡**」、一つの原型から複数の鑄型を作り、その鑄型で作った同型の鏡を「**同型鏡**」と呼ぶ。また、製品そのものを型として粘土に押し付けて作った鑄型で制作した鏡を「踏み返し鏡」と呼んでいる。

4

4. 中国鏡と倭製鏡

- 中国では**4千年前から鏡が製作**されており、BC1200年頃には量産されていた。特に、前漢末から後漢初頭（BC1世紀～AD1世紀）以降、複雑な文様を持った鏡が作られた。
- 日本では弥生時代中期（BC2世紀）に中国産の鏡（舶載鏡）が流入し、北九州の甕棺墓から出土。
- 一方、中国の工人から技術を習い日本国内でも鏡作りが行われるようになった（「仿製鏡」「倣製鏡」「倭製鏡」「倭鏡」）。



5

5. 銅鏡の種類

銅鏡には、製作地、文様の流行などにより多くの種類がある。
主な鏡は以下の通りである。

〔多鈕細文鏡〕

BC6世紀以降、中国で製造。BC2世紀頃に北部九州に伝わった。
鈕が複数個（2～3個）あり、細い線で幾何学模様を描いている。



6

[内行花文鏡]

中国・後漢（AD25～220）で流行した鏡。弥生時代から古墳時代にかけて日本に伝わる（倣製鏡も多い）。北部九州（平原遺跡等）での出土が多い。中央に8つの連弧が描かれている。



[方格規矩四神鏡]

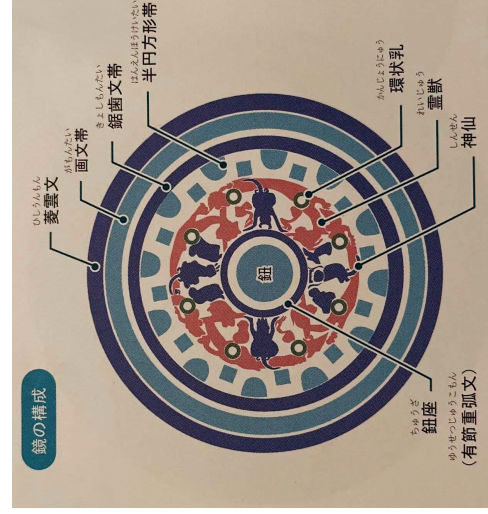
漢鏡の一つ。内区が方格（四角形）と規矩（さしがね状）に分割され、方格には十二支を配し、四神（青龍、朱雀、白虎、玄武）が描かれている。弥生時代の北部九州で出土する。



7

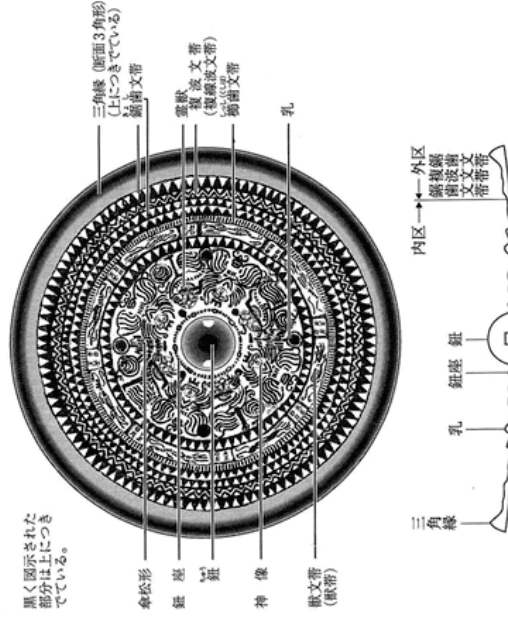
[画紋帯神獸鏡]

中国・後漢で製造。近畿を中心に90面出土。内区に神像と獣を配置し、周辺に帯状の文様が巡らされている。



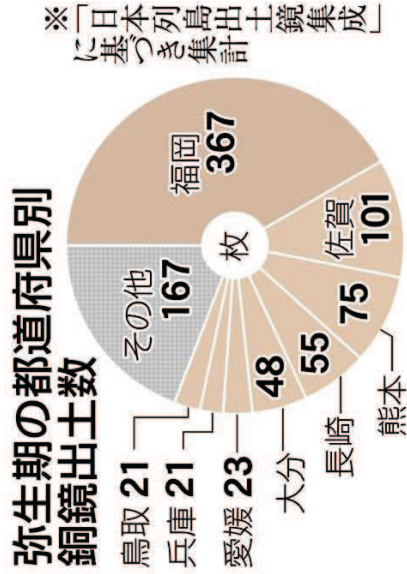
[三角縁神獸鏡]

日本で500面以上出土。縁部の断面が三角形状になっており、内区に神獣が描かれている。



8

そのほか、連弧紋鏡、旋回式獣像鏡、交互式神獸鏡、乳脚紋鏡、珠紋鏡など多くの種類がある。



◇銅鏡の多い古墳上位10基（概考研まとめ）

古墳名	所在地	全長（m）	鏡数（枚）
①桜井茶臼山	奈良	204	103以上
②椿井大塚山	京都	175	36以上
③佐味田宝塚	奈良	112	約35
④黒塚	奈良	130	34
④新山	奈良	126	34
⑥鶴山丸山	岡山	58～68	約32
⑦大和天神山	奈良	113	23
⑧壺井御旅山	大阪	45	22
⑧川柳將軍塚	長野	91	約22
⑩石塚山	福岡	130	約16

6. 日本における銅鏡研究の歴史

- I 江戸時代以前…… 拓本、漢籍による研究
- II 明治～戦前期…… 分類、編年研究（富岡謙蔵、梅原末治）
- III 1950～60年代……三角縁神獣鏡の研究が中心（小林行雄）
- IV 1970～80年代……漢鏡、倭製鏡、三角縁神獣鏡の分類・編年
- V 1990年代以降……鏡の詳細な観察、製作地、製作技術、流通

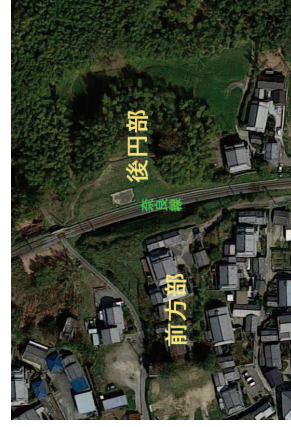


- 1877 モースが大森貝塚を発見
- 1889 人類学会創設
- 1892 坪井正五郎が東京帝大理科大学教授に就任
- 1895 考古学会創設
- 1897 三宅米吉が銅鏡の論考を発表(「考古学会雑誌」)
- 1902 八木桒三郎が鏡の沿革を考察
- 1908 高橋健自(東京帝室博物館)が銅鏡を分類
- 1920 富岡健蔵『古鏡の研究』
- 1925 梅原末治『鑑鏡の研究』
- 1961 小林行雄『古墳時代の研究』……三角縁神獣鏡の意義を指摘
- 1979 樋口隆康『古鏡』
- 1989 岸本直文「三角縁神獣鏡製作の工人群」
- 1991 福永伸哉「三角縁神獣鏡の系譜と性格」

11

7. 三角縁神獣鏡をめぐる論議

- 富岡健蔵(1873—1918)、梅原末治(1893—1983)の銅鏡研究
……ともに畿内説を支持、魏の時代に制作されたと主張
- 1953年 樺井大塚山古墳より30面以上の三角縁神獣鏡出土
→ 小林行雄(1911—1989)が研究……同范鏡論、伝世鏡論
「畿内説の有力な根拠」、「卑弥呼の「銅鏡百枚」の最有力候補」
⇒ 日本の初期国家形成に果たした鏡の役割



12

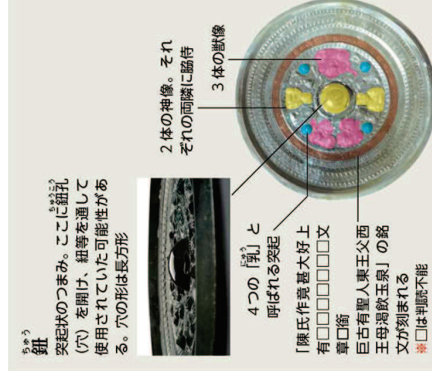
文様が精緻な鏡は「舶載鏡」(中国製)

文様が粗雑な鏡は「倣製鏡」(国産)

- ・ 森浩一が三角縁神獸鏡国産説を主張(1962)
 ← 中国で一面も出土していない
 松本清張、古田武彦、安本美典も国産説を支持
- ・ 王仲殊(中国の考古学者)が「呉の工人が日本列島で製作」と指摘(1981)
 ← 各種神獸鏡は江南地方を中心に出土している
- ・ 田中琢が「日本向けに中国で特別に鑄造」とする「特鑄説」を提起(1985)
- ・ 1986年 京都府福知山市で「景初四年」(実在しない年)を刻んだ鏡が出土



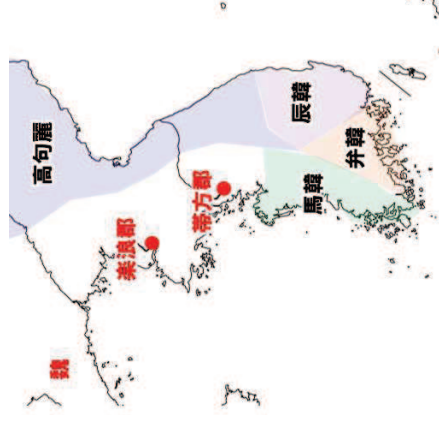
- ・ 福永伸哉が鏡の鈕の形状(長方形)、外周突線の存在を根拠に魏鏡説を主張(1991)……「舶載」三角縁神獸鏡は魏で製作された」
← 「倣製鏡」(国産)の存在は認めていた
- ・ 車崎正彦が、三角縁神獸鏡は全て中国製であると主張(1999)……「舶載」鏡は魏鏡、「倣製」鏡は西晋鏡
→ この説を支持する研究者が多くなった
- ・ 三角縁神獸鏡の製作期間を巡る論争……短期と長期
- ・ 原材料を巡る論争……鉛同位体比の分析、微量元素の分析



【辻田淳一郎『鏡の古代史』(2019)】

- ・「舶載」鏡は3世紀後半に楽浪郡・帯方郡域で製作
- ・「倣製」鏡は4世紀代に日本で製作
← 西晋滅亡(316年)、楽浪郡・帯方郡滅亡(313年)
- ・卑弥呼がもらった銅鏡百枚は後漢鏡(方格規矩四神鏡、画文帯神獸鏡等)
……三角縁神獸鏡ではない
- ・「三角縁神獸鏡は卑弥呼が魏への遣使を契機として生産が行われた鏡」
……多くの古墳時代研究者の共通認識
- ・「列島社会(日本)の側の必要性に応じて製作された鏡であった。」

辻田 淳一郎
1973年 長崎県生まれ
2001年 九州大学大学院修了
現在、九州大学准教授



15

【岡村秀典『鏡が語る古代史』(2017)】

「ちょうどその年(景初3年)に「陳氏」が後漢鏡をモデルに三角縁神獸鏡を創作したプロセスが明らかになり、モデル鏡の有力な候補が洛陽で発見されたことから、「銅鏡百枚」が三角縁神獸鏡であり、その工房が洛陽にあった可能性が高くなった。」

「その後の研究によって神獸鏡は四川の広漢派にはじまり、二世紀後半に江南の呉派や会稽派にひろがったほか、徐州の淮派にも受容されたことが明らかになった。」



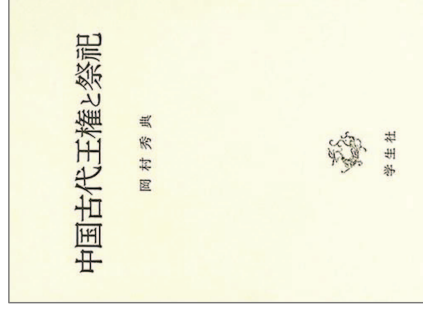
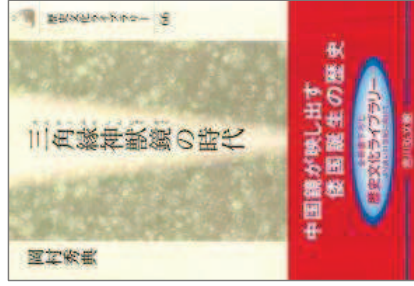
岡村 秀典
1957年 奈良県生まれ
1980年 京都大学卒(考古学)
京都大学人文科学研究所教授
を経て、現在名誉教授

16

「三角縁神獣鏡はこうした**徐州の神獣鏡を母胎として生まれた**のであり、江南の呉鏡とは図像文様や銘文が相当にちがっている。このため近年、徐州工程学院の楊金平は、**徐州の鏡工が日本に渡来して三角縁神獣鏡を制作した**と論じている。」

「倭王卑弥呼が魏に使いを送った景初三年（239）、**画文帯神獣鏡をモデルに三角縁神獣鏡が創出された**。」

「魏が倭王に贈った「銅鏡百枚」は、**この年に鑄造された三角縁神獣鏡を**おいて**ほかにみあたらない**。」

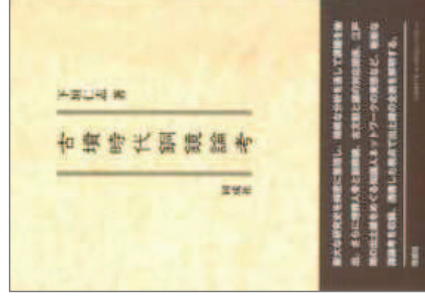


【下垣仁志『鏡の古墳時代』(2022)】

「この鏡は、専ら我が御魂として吾が前を拝くが如拝き奉れ。」(『古事記』[天孫降臨段])

「与に床を同じくし殿を共にして、斎鏡(いはひのかがみ)とすべし。」(『日本書紀』)

「製作地について専門研究者以外をにぎわす三角縁神獣鏡は、他鏡式も勘案した総合的分析をつうじて、**列島外の製作であることがほぼ確定的**になった。**その細分と編年は精緻をきわめている**。」(岩本崇『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』(2020)を文献としてあげている)



下垣仁志

1975年 東京都生まれ
2006年 京都大学博士課程修了(考古学)
京都大学准教授

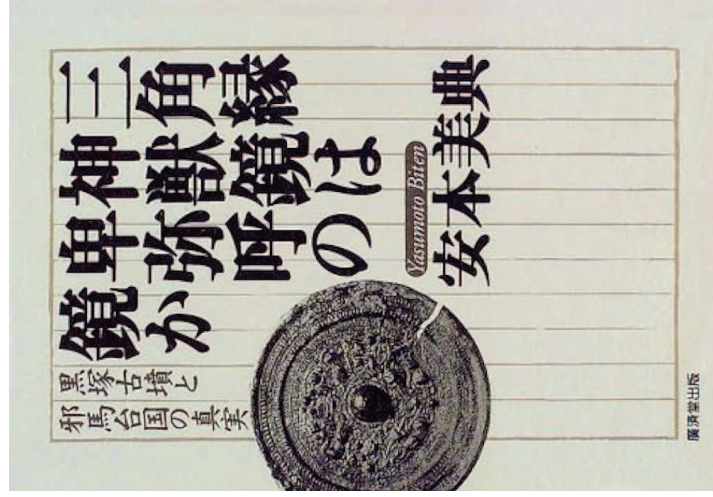
「三角縁神獣鏡は列島外での確実な出土例を欠くため、列島製だとい
う主張が根づよく発せられてきた。しかし、倭製鏡とは技術面でも文様
面でも接点がるでなく、逆に同時期の華北系の中国鏡と緊密な接
点を長期に維持する。」

「**倭社会の需要に対応した受注的生産が大陸や半島で断続的に実
施された**とみたほうが、よほどの現象を説明できる。」

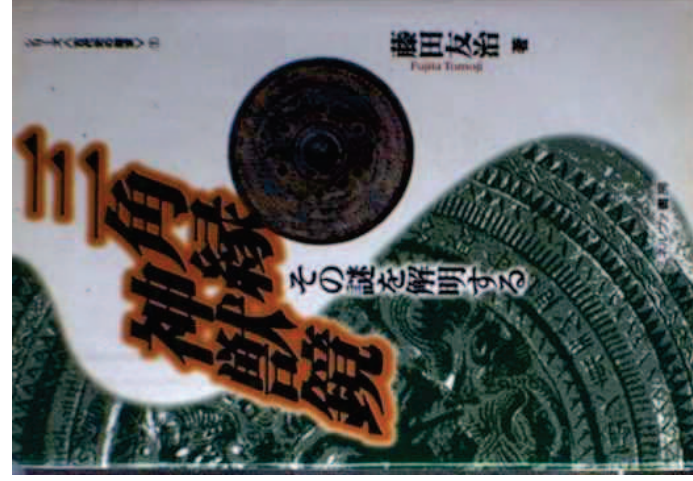
「古墳出現期前後に、三角縁神獣鏡や画文帯神獣鏡のほかにも多量
の器物が列島に流入し**畿内中枢力を介して配布されたらしい。**」



19



(1998年)



(1999年)

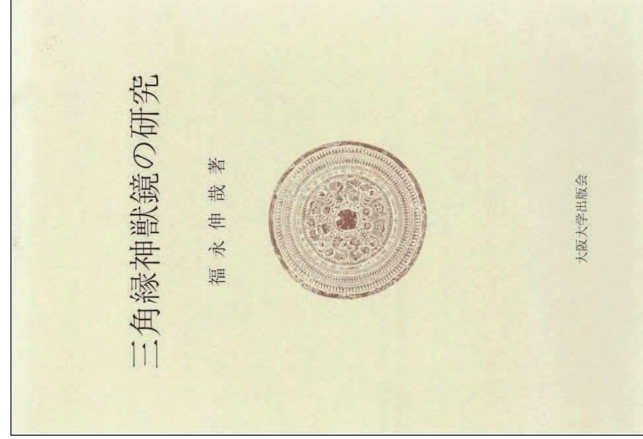
20



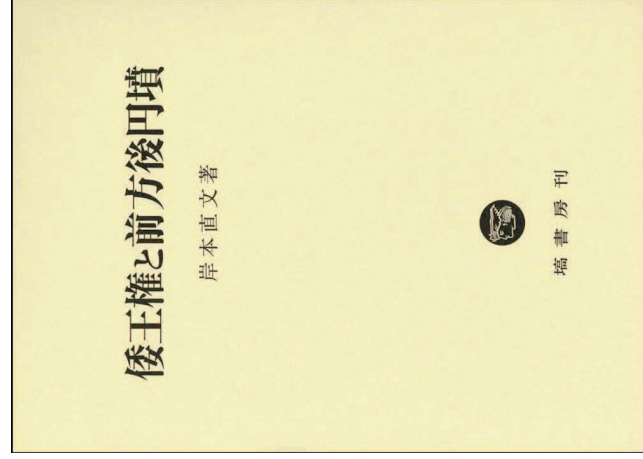
(2013年)



(2025年)



(2005年)



(2020年)